



# JSPS London

# NEWSLETTER

No.67  
2022 SUMMER



Flags on Regent Street in London for the Platinum Jubilee, marking the 70th anniversary of the Queen's accession to the throne (photo by Kohei Takizawa)

## Contents

### 1 [巻頭特集]

第2回 JBUK若手研究者フリートーク

### 3 センター長の英国観望

第4回 「新緑の季節を迎えて、活動も本格化」

### 7 在英研究者の者窓から

第26回 藤原 彩音 (Ayane FUJIWARA)  
(Nottingham Trent University)

### 9 英国の大学・研究機関紹介

フランス・クリック研究所

### 10 ぼりーさんの英国玉手箱

「プラチナ・ジュビリーでの英国国内の様子や  
お祝いについて教えてください」

12 山田さんの徒然なるままに  
第10回 「ある失読症者の話」

15 Recent Activities (FY2021)  
第1回 Interdisciplinary Talk開催報告

17 Voice! from Alumni member  
Vol.22 Dr Ojodomo J. Achadu  
(University of Warwick)

20 JSPS Fellowship Programmes & International  
Collaborations Application Schedule

## 巻頭特集

## 巻頭特集

## 第2回 JBUK若手研究者フリートーク

2022年3月3日に在英日本人研究者ネットワーク (JBUK=Japanese researcher's network Based in the UK) に登録している若手研究者を対象にフリートークイベントを開催しました。

2022年3月3日(木)9時(日本時間18:00)より、在英日本人研究者(JBUK)ネットワークに登録している若手研究者を対象として「第2回JBUK若手研究者フリートーク会」を開催しました。

COVID-19の感染拡大の影響により、対面でのイベントが減少する中、各分野で英国での研究経験をお持ちのシニア研究者を講師としてお招きして、若手研究者のネットワーキングを目的としたフリートーク会を実施しました。第2回は人文・社会科学分野を対象に、ヨーク大学の山形孝志先生に講師をお願いしました。



山形孝志教授(ヨーク大学)

## — 講演者紹介 —

## 山形 孝志(やまがた たかし) 先生

立命館大学卒業後、英国マンチェスター大学院に進学。その後、ケンブリッジ大学にて3年間研究員として経験を積み、現在はヨーク大学経済学部教授。他に、大阪大学(特任教授)と東北大学(客員教授)にポストを持つ。専門分野はパネルデータ分析、計量経済学。

まず山形先生に、ご自身の経歴についてご紹介いただき、その後、参加者と海外での研究に関して興味のある話題についてフリートークが行われました。

## 【論文の重要性】

経済学の分野では、やはり査読付き論文の学術誌掲載が重要。米国の大学や米国と競争している大学では当たらないが、英国の大学では求職時の条件に論文掲載が必要なものが多い。ヨーロッパのJob Marketも体系化されつつあり、

European Economic Associationを通して応募、そして面接へと至る。

## 【論文の投稿頻度とファーストオーサーの意味】

経済学分野では、理論と応用で学術誌掲載までにかかる平均年数が異なるが、年に1、2本、新しい研究論文を書くことが望ましい。論文著者の掲載順は研究グループによって異なり、そこまで気にする必要はないが、自分がどの研究部分で論文に貢献したのかは大切である。大規模な共同研究グループの場合、理系の論文ほどではなくとも多数の著者が並ぶことがある。最近では「ポスドク」ならぬ「ブレドク」が研究室で作業していることもある。

## 【日本の研究費制度との比較】

日本の科研費は、基盤研究(C)～(A)など金額によって分かれているため、少額の研究費は若手や同じ水準の研究者で競うことができる。英国の外部研究資金は、The British Academy や The Leverhulme Trustなどの少額のファンドがあるものの、UKRIが提供する研究費はそこまで細分化されていない。UKRI grant研究費の最低金額は大きく、学際的研究など大きなプロジェクトが主となり、若手研究者が研究代表者として研究費を獲得するのは難しくなっている(若手研究者にはUKRIのポスドク・フェローシップなどが適当かもしれない)。

## 【英語の難しさをどのように乗り越えているか】

分野によって異なると思う。一文一文気を付けて、伝えたいことがうまく伝えられるように論文を書く。同じ内容を書くにしても、ストーリーラインや伝え方を工夫する必要がある。また、ネイティブによるブルーフリーディングは必須。良い論文を読んで言い回しや単語の使い方を学ぶことも有効である。

## 【人文社会科学系での学際的研究について】

「医療経済学」や「環境経済学」などの分野では他分野との共同研究が盛んである。また、行動経済学は「心理学」や「脳神経科学」とのつながりが深い。このような学際的研究は大きなプロジェクトとなり、UKRIなどの外部研究資金を狙うことができ、自然科学系の論文誌に掲載されることもある。ただ、学際的研究の場合、専門分野をまたぐため、トラディショナルな専門誌に掲載されにくいというリスクを伴うことがある。

## 第2回 JBUK若手研究者フリートーク

## 【研究活動について】

自分の研究分野を持ち、その分野での地位を地道に築いていくことを中期的な目標とするのがよいかもしれない。その研究分野はPhDの研究テーマと違ってよい。楽しんで打ち込める研究分野を開拓することが理想である。

## 【英語による講義経験が必要か】

(山形先生の経験では)1年間に3-4科目程度を担当している。その他、ヨーク大学では、20名くらいの学生のパーソナルチューターを務めている。大学での講義経験も大切であるが、やはり研究が第一である。

## 【英国の研究・教育評価について】

London School of Economics and Political Science (LSE)は研究評価のランキングは高いが、教育評価のランキングがあまり高くなく、そのため最近教育に力を入れており、TAIに負担がかかっているように見える。また、女性研究者の採用なども、評価に影響するため熱心である。日本は英国と比べるとあまり女性研究者の数が多くない印象がある。

## 【英国で研究する魅力とは】

世界的に著名な研究者とやりとりができる点は魅力。分野によるが、英国の方が政府のデータへのアクセスが容易である。日本とは違って研究者の多様性が高く、年功序列もない。リモートワークなども導入が早く、労働倫理もよい。地に足についた研究をしている。成果があれば適切に評価され、給料も日本よりは高い。ただ最近は大学の中央集権化が進んで

おり、管理部門に特化した教授が様々な大学の管理部門職を歴任している。

## 【Brexitの影響】

EUからの留学生が減っていることに危機感がある。Brexitが決まってから、EUに拠点を作る、EUの大学と協定を結ぶなど、EUとのコネクションをつなぎとめる努力をしている。他方、日本を含むEU以外との連携を進める動きもあるが、COVID-19の流行のため、留学生や外国人研究者の日本への入国が難しい状況である。

## 【JSPSに求めること】

海外の日本人も応募できる研究費があれば、海外での研究活動のサポートになる。また、科研費に英語で申請することのハードルが下がれば、日本の大学の国際化が進むのではないかな。イギリスの学会で、ややシニアの研究者と若手研究者のマッチングをしてくれるメンタリングスキーム制度があり、大変役に立った。JBUKに登録している、英国の日本人研究者が、これから英国に行く若手に有用な知識を与えられる制度などがあればよい。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～  
 以上がフリートークの要約ですが、2時間という短い時間の中でも有意義な議論が行われました。参加者からは「フリートークという形は形式ばってなくてよかった」「英国での失敗談などもあれば聞いてみたかった」という感想が聞かれました。



上記写真は参加者で、左(川窪悦章氏(London School of Economics and Political Science))、中央(坂田のぞみ氏(広島大学))、右(志水洋人氏(The University of Edinburgh))。



# センター長の英国観望

## 第4回 「新緑の季節を迎えて、活動も本格化」

ロンドン研究連絡センター・センター長  
小林 直人



### 1. はじめに- 春から初夏へ

曇りがちで日の短い冬も終わり、3月も半ばを過ぎるとロンドンは急速に春めいてきました。住まいの近くのスイス・コテージの公園にはソメイヨシノの桜並木があり、日本と同じようなお花見ができました。4月の晴れた日にバッキンガム宮殿の近くのグリーンパークに行くのと、皆半袖で日光浴をしています。また5月になると種々の花が咲き、木々の緑も濃く鮮やかになってきました。図1のオフィスの近くのリージェンツ・パークのバラ園では、色々なバラが咲き始めました。図2は私の住まいから北東に2kmくらいの所にあるロンドンで最も標高が高いハムステッド・ヒースという所からの市街の眺めです。木々の葉が茂って遠くが見通せなくなっています。季節の移り変わりは早く、毎日急速に日が長くなっていきます。真冬には午後3時台には暮れていた太陽も、6月には夜9時台半ばになっても沈みません。

一方、ロンドンセンターの活動は1月まではCOVID-19オミクロン株の流行で自粛せざるを得ませんでしたが、2月末にはバーミンガム大学やオックスフォード大学を訪問して国際共同研究についての意見交換をすることができました。また学会もリアルで開催されるようになり、英国物理学会等いくつかの研究集会にも参加できました。新年度になると英国内や日本からの

訪問者も増えていよいよ活動が本格化してきました。

### 2. REF2021の結果とその特徴

前々号のニュースレターで英国の大学の研究評価REF (Research Excellence Framework)の説明をしましたが、昨年度行われたREF2021の結果が去る5月から6月にかけて発表されました。今回は7年前の2014年に行われました[1,2]。REF2021の研究評価対象期間は2013年8月1日から2020年7月31日までの7年間ですが、インパクトに寄与した研究は2000年1月1日から2020年12月31日までの21年間のものが有効となります。当初、成果報告書の提出期限が2020年11月27日だったのですが、COVID-19のために4ヶ月延期され2021年3月31日になりました。

REF2021の前回との大きな違いは、アウトプット60%、インパクト25%、研究環境15%の重みづけで評価がされたことです。(REF2014では、それぞれ65%、20%、15%。)アウトプットは論文や著書等の研究成果のことですが、インパクトはその研究が与えた社会・経済・産業・文化・政策・健康等への効果を指します。インパクトの重みが前回より5%増えましたが、これは政策立案側の意図が大きかったものと言われています。



図1. リージェンツ・パークのバラ園



図2. ハムステッド・ヒースからのロンドン市街の眺め

## センター長の英国観望

表1にREF2021とREF2014の指標の様々な比較を示しますが、今回の大きな違いは成果提出研究者数が前回よりも46%増えたことです。これは前回では学部や学科の一部の研究者のみからの成果提出でよかったものが、今回は全員の研究者からの提出を求めたからです。一方で、前は研究者一人あたり平均4件の研究成果を求められたのに対し、今回はFTE（Full-Time Equivalent, 常勤換算）一人あたり平均2.5件の提出に変更されたので、アウトプット数は今回がむしろ減りました。また評価をする学術分野単位（Unit of Assessment, UoA）は36から34に減りました。4つのEngineering分野を一つにしたのと、新たにArchaeology（考古学）分野が増えたことによります。

	REF2021	REF2014
参加大学数	157	154
成果提出研究者数	<b>76,132</b>	52,061
成果提出数	1,878	1,911
アウトプット数	185,594	191,150
インパクト事例研究数	6,781	6,975
4*（世界をリードする研究）の割合	<b>41% (36%)</b>	30% (22%)
3*（国際的に優れた研究）の割合	<b>43% (47%)</b>	46% (50%)
UoA (Unit of Assessment) の数	34	36
評価パネル参加者数	900	898
インパクト評価に関わるユーザー数	220	259

表1. REF2021とREF2014の様々な指標の比較

また結果から見て今回の最も大きな特徴の一つは、研究成果（アウトプット＋インパクト＋研究環境）のうち4\*（世界をリードする研究）と3\*（国際的に優れた研究）に該当するものがそれぞれ41%、43%（アウトプットの分野のみでは、36%、47%）と大幅な増加をしたことです。母数の内容が前回とは違いますので、一概の比較はできませんが、大学関係者は研究の質（Quality of Research）が向上したことを喜んでいるようです。

表2に全体的なプロフィールで示された上位大学の状況を示します[3]。GPA（Grade Point Average）とは、その大学の4\*、3\*、2\*（国際的に認められている研究）、1\*（国内で認められている研究）の割合（%）にそれぞれ4、3、2、1を乗じ、それらの和を100で割った値です。また研究力（Research Power）とはGPAにFTE 研究者数を乗じたもの（1,000を上限として正規化）になります。この結果を見ると、GPAに関してはオックスフォード大学、ケンブリッジ大学、UCL等の大規模大学、インペリアル・カレッジ・ロンドンやLSEのような中規模大学、Institute of Cancer ResearchやLondon School of Hygiene and Tropical

Medicineのような小規模大学のそれぞれが上位に入っているのは好ましい結果だと思います。またブリストル大学やマンチェスター大学、ヨーク大学等は前回から順位を上げています。

今回は参加研究者が研究に関係する全員であったことにより前回との直接の比較はできないものの、今まで成果提出人数が少なかった大学や成果数が少なかった大学の優れた成果が取り入れられたため、今までと異なるいくつかの大学が上位を占めるようになったとのことです。オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、UCL、インペリアル・カレッジ・ロンドン等のいわゆるゴールデン・トライアングルの助成金専有率が2014年の22%から2021年には19%に減るのではと予想されています。

2014年に始まった当初のREFは、大学の評価にインパクトという要素を入れたということで非常に注目をされましたが、今回はさらに多くの事例研究で多様性、豊富さ、精確性等で向上が見られたという報告がされています。実際インパクトの4\*の割合は前回の44%から今回は50%に増加しています。またこのインパクトの高い評点の結果は分野を超えてすべての大きさの評価単位でも見られたとの報告があります。

今回のREFの結果を見ると、英国が大学の研究評価に関して常に改善を行っていることが分かります。また英国の大学の研究力が向上していることも見て取れます。一方で、これにはかなり政治の寄与がありますし、また「REFは大学や部門を「勝者」または「敗者」として恣意的に指定する研究文化を象徴している。それは大学職員の時間と資源の浪費であり、資金提供はしばしば構造的な不平等を定着させる [4].」という批判もあります。いずれにしろこれらの努力は英国の研究活性化には一定の貢献をしているとは言えましょう。

GPA 順位	大学名	UoA の数	GPA	GPA 2014	同左 順位	研究力	同左 順位	助成資金占有率 (%)
1	Imperial College London	11	<b>3.63</b>	<b>3.36</b>	2	473	9	2.89
2	Institute of Cancer Research	2	<b>3.58</b>	<b>3.40</b>	1	31	101	0.18
3	University of Cambridge	30	<b>3.53</b>	<b>3.33</b>	5	<b>846</b>	3	<b>4.99</b>
3	London School of Economics and Political Science (LSE)	15	<b>3.53</b>	<b>3.35</b>	3	193	33	1.11
5	University of Bristol	28	3.51	3.18	11	441	10	2.49
6	University College London (UCL)	32	3.50	3.22	8	<b>935</b>	2	<b>5.34</b>
7	University of Oxford	31	3.49	3.34	4	<b>1,000</b>	1	<b>5.75</b>
8	University of Manchester	31	3.47	3.16	17	620	5	3.44
9	King's College London	25	3.46	3.23	7	547	6	3.04
10	University of York	24	3.45	3.17	14	275	22	1.50
10	London School of Hygiene and Tropical Medicine	2	3.45	3.20	10	131	48	0.71

表2. REF2021の全体的なプロフィールで示された上位大学の結果 [3]

## センター長の英国観望

### 3. 学際研究について

前号のニュースレターで英国の学術研究界では学際研究 (Interdisciplinary Research, IDR) を積極的に進めているということを書きましたが、今回はそれをより詳しく見ていきたいと思います。すでに「多くの大学がIDRIに言及するのは、複雑な社会的・環境的・健康的課題の解決は一つの専門分野の知識や方法論では達成できず、多様な分野の統合された知識が必要とされるから」と前回述べましたが、IDRを進めるにあたっては、次のいくつかの課題があると考えられます。すなわち(1) 動機、(2) 研究費助成、(3) 進め方、(4) 成果公表、(5) 研究評価です。

最初の動機ですが、これは社会問題解決型研究のようにいわばミッション駆動でIDRを進める場合が一つの型でしょう。例えば現在世界の大きな課題である「ネットゼロ社会の実現」のためには、理学・工学・環境科学・社会科学等の専門家の結集が必要です。その場合の大きな課題は、目標達成に向けてどのように全体の活動を組織化していくかが重要になります。もう一つの型は好奇心駆動のボトムアップ型研究の場合です。これは研究者個人あるいは研究チームの自発的な活動によるもので、直面している研究課題の解決を図るためにIDRを進めることとなります。この場合でも個人であれ、研究チームであれ、必要な研究者に声をかけ共同研究を進めIDRを組織化する能力が必要になります。

2番目の研究費助成ですが、英国の場合最大の研究費助成機関であるUKRI (UK Research and Innovation) は積極的にIDRを進めようとしています[5]。2021年1月にUKRIに所属する7つの研究評議会 (Research Council, RC) の間で学際領域の研究に助成する原則とプロセスが定まりました。例えば複数の分野の境界領域にある研究への助成を受けたい場合は、Joint Electronic Submissions (Je-S) というシステムを使って主たるRCに研究費助成申請を行います。その研究が別のRCとも関係があると評価されるとそのRCに連絡をして共同助成を行うこととなります。また採択審査は関連する研究領域のピア・レビューアによって行われます。主RCはレビューアの適切な組み合わせを選択する責任があります。このようにすでにIDR申請が制度化されていることは注目に値すると思います。

3番目はIDRの進め方に関するものです。今年の5月の半ばにRoyal SocietyでFST (The Foundation for Science and Technology) 主催の“Increasing Interdisciplinarity in UK R&D”と

題するワークショップがあり筆者も参加しましたが、そこではIDRの推進経験者から「ワークショップ等を頻繁にやり、相互理解に努めることが必要」「IDR推進のキーはgenerosity (寛大さ) である」と言われていたのが印象に残りました。先ほど述べたようにリーダーにはIDRを組織化する能力が求められますが、分野や言語、方法論の異なる研究者同士が協力するには相当の「相互理解」と「寛大さ」が必要なのでしょう。

4番目の成果公表は中々難しい問題があります。特に論文を投稿する場合、どの学術誌に投稿するかが課題ですが、さらに適切な査読者に巡り合えるかが最大の課題になります。Durham大学のV. Strang and T. McLeishは2015年にIDRを評価するための実際的なガイドを出しています。その中で特に「IDRの効果的な評価には、高品質のIDRの経験がある研究者の判断が必要である。」ということを書いてありますが、極めて重要なことと言えます[6]。

5番目の研究評価については、上記のREF2021の例が参考になると思われます[7]。今回のREFではIDRのアウトプットをかなり重視し、その適切な評価方法について助言するIDAP (Interdisciplinary Research Advisory Panel 学際研究諮問委員会) を作りました。その助言に基づきIDRの評価は二段階で行われます。まず34の評価サブパネル (UoA) 毎に最低2名のIDRアドバイザーが指名されます。彼らが中心となり、成果提出者がIDRとして申請した課題および特段の申請がなくてもIDRと考えられる課題を抽出します。次にIDRとして認められた課題はそのサブパネル内で評価を行うか、さらに他のサブパネルのメンバーを加えて評価を行うかの判断を行い、その課題に適切なメンバー構成で評価を行います。一つのサブパネル内での評価が困難な場合はサブパネル同士の共同評価を行います。このようにしてIDRだからといって不利にならないように評価が決定されます。IDRの評価が制度化された好例だと思われます。

新たな概念の創出には異質のものとの結合が必要でしょう。学術研究の分野でも異質の分野の知識の結合が必要な学際研究が求められますが、それはそれほど容易ではありません。ただ色々な方法を制度化しようとしている英国の学術研究界の試みは参考にすべきことが多くあると考えられます。

### 4. 漱石の後半の住まい

前々号で漱石がロンドンに来てすぐに住んだ第1と第2の住まいをご紹介しましたが、その後の住まいの跡にも行ってみま



## センター長の英国観望

した。図3の地図に数字を記してありますが、第3の住まいはテムズ川の南(6 Flodden Road)にありました。漱石が住んでいた建物はすでになく、別の建物が建っていました。漱石は「以前の住居(ウェスト・ハムステッドの第2の住居)のあたりが小石川であるとすれば、ここは深川のような所だ。どちらにしても辺鄙(へんぴ)なところである。」と書き記しています[8]。第4の住居(図3の写真右)は、さらに南西に行ったさらに辺鄙な所(5 Stella Road)でした。大家の引っ越しのために一緒に移らざるを得なかったのですが、漱石はこの殺風景な景色を見て大いに落胆したそうです。確かに付近はあまり環境がよくありませんでした。

ここには1901年3月に引っ越しましたが、その年の5月にはドイツ留学の帰途に後に「味の素」の発明で有名となった池田菊苗が訪ねて来て、漱石は大いに刺激を受けたとのこと。

ロンドンでの漱石の第5の住まいはThe Chaseにある建物です。



図3. 漱石の第3～5の住まいの場所(左)、漱石の第4の住まい(右)

(図4の写真左)。漱石は1901年7月から帰国する1902年12月まで、ここの3階に住みました。付近にはクラップム・コモンという公園(図4の写真右下)もあり、住環境も今までで一番よかったと思われます。建物の外壁にブルー・プラークという史跡案内板があり、「日本の小説家夏目漱石(1867-1916)がここに住んでいた(1901-1902)」と書かれています。日本人で英国のブルー・プラークに名を残しているのは夏目漱石のみだそうです。

この頃、大家の奥さんの強い勧めで自転車の練習を始めたものの大変苦勞したことが、漱石の「自転車日記」に書かれています[9]。練習した場所はクラップム・コモン公園や家から少し北西に行ったラベンダー・ヒルという所だったそうです。

漱石の住まいをすべて見てみましたがどこも印象深く、20世紀初頭に漱石がどのような思いでロンドンで暮らしていたのか、大変感慨深いものがありました。



図4. 第5の住まい(左)、その前の広い道路(右上)、クラップム・コモン(右下)

[1] REF2021ウェブサイト <https://www.ref.ac.uk/>

[2] REF2014ウェブサイト <https://www.ref.ac.uk/2014/>

[3] “REF2021: NEWS”, 12 MAY 2022 Times Higher Education; p.9

<https://flipbooks.timeshighereducation.com/19712/72961/index.html?3604>

[4] “REF 2021: more than 40% of submissions given highest classification”, 12MAY22 University Business,

<https://universitybusiness.co.uk/research/ref-2021-more-than-40-of-submissions-given-highest-classification/>

[5] “Get support for your project ”, <https://www.ukri.org/apply-for-funding/before-you-apply/preparing-to-make-a-funding-application/if-your-research-spans-different-disciplines/>

[6] V. Strang and T. McLeish “Evaluating Interdisciplinary Research: a practical guide”, (2015).

[https://www.iasdurham.org/wp-content/uploads/2020/11/StrangandMcLeish.EvaluatingInterdisciplinaryResearch.July2015\\_2.pdf](https://www.iasdurham.org/wp-content/uploads/2020/11/StrangandMcLeish.EvaluatingInterdisciplinaryResearch.July2015_2.pdf)

[7] REF2021 “Interdisciplinary research outputs: assessment protocol” <https://www.ref.ac.uk/media/1646/idr-protocol.pdf>

[8] 夏目漱石「倫敦消息」『筑摩全集類聚版夏目漱石全集』筑摩書房(1971)

[https://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/779\\_14973.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/779_14973.html)

[9] 夏目漱石「自転車日記」『筑摩全集類聚版夏目漱石全集』筑摩書房(1971)

[https://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/768\\_14947.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/768_14947.html)

# 在英研究者の 者窓から

## 第26回 Nottingham Trent University 藤原 彩音



### Dr Ayane FUJIWARA

PhD, MSc, MA, BA(Hons), LRSM

Senior Lecturer in Marketing, Nottingham Business School, Nottingham Trent University

### Biography

2009 Bachelor's degree in Music from University of Newcastle Upon Tyne

2012 Master's degree in psychology of Music from Sheffield University

2015 Master's degree in International Business from Nottingham Trent University

2019 Completed Doctorate in Marketing from Nottingham Trent University

2019- Senior Lecturer in Marketing at Nottingham Trent University

I am Dr Ayane Fujiwara, a Senior Lecturer at Nottingham Business School, Nottingham Trent University. My research and teaching specialism is in Marketing and in particular, consumer behaviour. I'm an early career researcher having completed my PhD in 2019, and I'm also completing the FHEA (Fellow of Higher Education) qualification. I currently lead modules at undergraduate level, in Digital Marketing which is linked with CIM (Chartered Institute of Marketing) qualifications and Digital Marketers Degree Apprenticeship course.

I left Japan at the age of 15 and completed my GCSEs and A-levels in the United Kingdom before pursuing Graduate and Post Graduate degrees at the University of Newcastle Upon Tyne, Sheffield University and Nottingham Trent University. My original interest was music, as I had played the piano since the age of 4, and therefore my undergraduate degree was in music. I also completed a piano performance diploma and am a Licentiate of the Royal Schools of Music. I started my own piano teaching business and I taught piano in more than 10 primary schools as well as teaching private students. Then my interest shifted to the psychological impact of music, which led to my doctoral research in the role of music as an online store atmospheric. For me, it was a natural progression to pursue an academic and lecturing career as I had been teaching music since graduating from Newcastle University, and I have always been enthusiastic about education and research. But I never thought I would complete a PhD and be

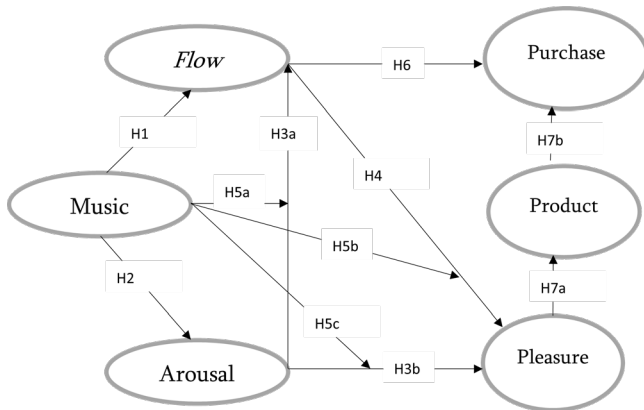
an academic in Marketing!

When I started my academic career, it was a bit of an eye-opener, as there is such a diverse and international mix of people involved in research, teaching and learning in the UK. This means different cultural backgrounds, expectations, and more importantly cultural learnings and discoveries. Most of my colleagues are from different countries outside of the UK, and there are a high number of international students, especially in the postgraduate degree courses, as well as many mature students. Inclusivity and accessibility are a big focus in the education sector, and I am continuously developing on how to best deliver lectures/seminars and disseminate my research, to make it as accessible as possible to accommodate a wide range of individual and cultural needs. Being exposed to such a diverse and liberal culture, along with conducting research or finding a research topic here can be interesting. Having studied consumers in the United Kingdom, I am now looking at consumer behaviours, back in Japan. So, this is hopefully where my research will progress in the future, looking at the behavioural differences between Japanese consumers, who traditionally has a more conservative mindset, and British consumers.

(Continued to the next page)



## 在英研究者の者窓から



*Conceptual framework of how music influences for and arousal, subsequently affects pleasure, product attitudes and purchase intention*

Although Nottingham Trent University has been recognised by REF (Research Excellence Framework) for its quality research, the Business School and the department are also practitioner-focused, and the teaching demand is extremely high due to it attracting a growing number of students every year. This is a result of quality teaching and well-designed courses achieving a high percentage of student employment rate. Nonetheless, this does put pressure on the academic staff, and I, at least, started to lose my identity as an academic. Am I a researcher? or am I a teacher? I started to question what is important for my career and development. Publishing your research is becoming more and more competitive, and teaching duties have become more demanding especially since the Covid-19 pandemic when the traditional (and familiar) teaching style had to suddenly be transformed into online/flex/hyflex (hybrid-flex) teaching. As we are left to our own devices to develop our research and skills, you need to follow your initiative and be proactive. And the key skill you need to have is to be able to network and make connections. It is not just in academia but is largely applicable to all industries. We use the term “Kone”, which derives from the word “connection”, in Japanese for a similar concept. In Japan it can sometimes be viewed as having a negative connotation, but in the UK, it is considered one of your strengths, and it can be summarised as “It’s not what you know, but whom you know”. It is about widening your opportunities by putting yourself in the crowd and making genuine connections with others. I think this is the main learning from my life in the UK.

The working environment within my university is extremely well suited for my work-life balance. As a mother to a 2-year-old, I do not feel any disadvantage or difficulty in progressing my career here. After working in the department while I

complete my PhD on a zero-hour contract, my permanent part-time contract started right before I gave birth to my son, and I was on maternity leave for the first 4 months of my employment. When I went back to work after the leave, I worked 2.5 days a week to start with, then I was able to increase my hours to 3.5 days a week. I can manage the time when I work as long as I do the allocated teaching hours, and (if I wanted) I can catch up with the work at the weekend and that is okay. This flexibility is something I value about working in the United Kingdom (although I cannot speak for other institutions) as it enables a female (and male) academic, like myself, not only to sustain a very good work-life balance but also to pursue and progress a career.

To round up, being a Marketing academic and working at a university in the UK is a career I never thought I would have, but as long as you have motivation, initiative and the will to make connections, the opportunities here are endless.

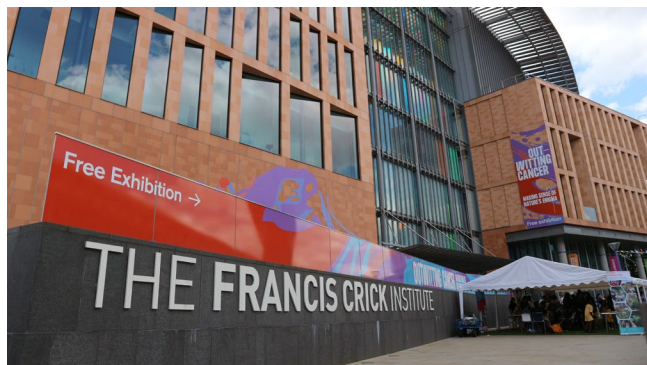


*Picture taken at the PhD graduation ceremony with the family*

## | 英国の大学・研究機関紹介

## フランス・クリック研究所 (The Francis Crick Institute)

突然だが、筆者の趣味は散歩である。休日は目的地を決めず、体の赴くまま街の様子や景色を楽しみながら歩くことが多いのだが、6月中旬のある休日、散歩のために自宅を出て間もなくした場所に人だかりを発見した。そこで目にしたのは「THE FRANCIS CRICK INSTITUTE」と大きく書かれたプレートと存在感抜群の外観を持つ建物だった。



立派で美しい外観は見る者の目を奪う

## ■異分野の専門知識を集結

本研究所は2016年11月にロンドン中心部、主要駅であるキングス・クロスとセント・パンクラス・インターナショナル<sup>1</sup>のすぐ近くで、多くの国立研究機関や病院、大英図書館を近隣とする場所に開所した。延べ床面積は93,000㎡(サッカー場17.5個分)、地下4階・地上8階建てにもなる欧州最大規模の生物医学研究所だ。研究所名になっているFrancis Crick(英・1916-2004)は、DNAの二重らせん構造の発見者の一人であり、1962年にはJames Watson(米・1928-)、Maurice Wilkins(英・1916-2004)とノーベル医学・生理学賞を共同受賞した科学者である。

そして、初代所長としてトップに立つPaul Nurseも2001年のノーベル医学・生理学賞受賞者だ。彼は5年間、英国王立研究協会(The Royal Society)の会長を務めており、政府からの諮問を受け英国の研究力が継続的に発展していくための公的資金投入に関する方策をまとめた“Nurse Review”の存在でも知られる。これにより、2017年に高等教育研究法が成立し、翌2018年にはUKRIが新設され、英国における研究レベルの維持・向上に大きく貢献している。

本研究所は、6つの団体と大学<sup>2</sup>の共同事業として開所されて以来、がん、心臓病、アルツハイマー病等の神経疾患、COVID-19を含む感染症等の発生経緯や治療法に関する研究が日々行われている。総工費は約6.5億(うち約3.5億が政府予算)にも上ったというこの大型研究所には、国内外から生化学に限らず、物理学・工学・数学等の分野の研究者と学生2,000人以上が集結し、100以上のプロジェクト研究チームが活動している。開所当初から

「Discovery without Boundaries(境界なき発見)」というコンセプトを掲げ、異分野の研究者同士の積極的なコラボレーションの大切さをうたっていることもあり、彼らが気軽にネットワークを構築したり、作業や意見交換ができるオープンスペースが多いのも大きな特徴だ。

## ■未来の研究者に科学の面白さを

冒頭、散歩中に発見した人だかりの話に戻そう。この正体は、本年6月11日にフランス・クリック研究所が2019年以來3年ぶりに実地開催をした「ディスカバリー・デー」という子供を中心とした一般向けのイベントに集まった人々であった。(通常は年に一度、実地開催しているが、2020、21年はCOVID-19の影響でオンライン開催だった。)外に立っていたスタッフに話を伺うと、大人であっても誰でも無料で自由に入場可能とのことだったので、お邪魔することにした。



3年ぶりの実地開催となったディスカバリー・デーには大勢の人が訪れた

そこでは、自転車発電機を使ってスムーズーを作る体験コーナー、ヒトの細胞や脳に関するクイズ形式のブース、観客参加型の実験ショー等の企画が催されていた。どの企画も子供たちの興味をかきたてる工夫が凝らされており、研究者たちを見つめる子供たちの目の輝きが大変印象的だった。

研究所では、今回のような定期的なイベントや展示会<sup>3</sup>等を通じて研究内容を公開しており、コロナ禍前は毎年25,000人以上の訪問者が足を運んでいた。さらに、研究所を構えるロンドンのカムデン自治区にあるすべて小学校に通う生徒を対象に科学の面白さを伝えるアウトリーチプログラムも実施しているというのは、地域への貢献や未来の研究者の育成に注力している姿勢の表れだろう。この日は、科学技術イノベーション立国・英国が誇る巨大研究所で最先端の研究により世界をリードしながら、次世代を担う子供に夢を与える研究者たちの熱意に触れた一日となった。

The Francis Crick Institute  
<https://www.crick.ac.uk/>

(国際協力員 滝沢航平)

- 1 国際列車「ユーロスター」のターミナル駅であり、大陸欧州の主要都市であるパリ、ブリュッセル、アムステルダムとの行き来も容易である。
- 2 英国の学術振興団体である医学研究会議(MRC)、2つの医学研究支援団体(ウェルカムトラスト財団と英国がん研究所)、ロンドン市内3つの大学(ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン=UCL、インペリアル・カレッジ・ロンドン、キングス・カレッジ・ロンドン)。
- 3 毎週水曜日から土曜日には、研究内容に関連した一般向けの展示会を開催している。

## ぽりーさんの英国玉手箱

～ 日本人の素朴な疑問に英国人ぽりーさんが答えます ～



Polly Watson

ロンドンセンターのローカルスタッフ。  
本コラムを通じ、英国の魅力をお伝え  
できたら嬉しいです。

**Q 6月上旬、英国王室のプラチナ・ジュビリーがありました。英国国内の様子やぽりーさんはどのようにお祝いたかを教えてくださいませんか？**

### A

#### ■世界で2番目に長い在位期間

2022年6月2日(木)から5日(日)にかけて4日間、プラチナ・ジュビリーという英国女王であるエリザベス2世(以下、エリザベス女王。)の在位70周年の記念行事があり、これは彼女が英国と英連邦国に長年奉仕されてきたことをお祝いするものでした。このお祝いができたことを英国国民として非常に誇りに思っています。英国の君主で70年間在位した方はこれまでにおらず、大変特別なものでした。弱冠25歳で戴冠されてから驚くべき長さであり、世界で最も長く在位したフランスのルイ14世の72年間に次いで、エリザベス女王は現在世界で2番目に長い在位期間であるのです。

#### ■これまでのジュビリー

これまでも節目ごとにお祝いがありました。1992年(40周年)のルビー・ジュビリーではパレードがありました。2002年(50周年)のゴールデン・ジュビリーでも、同年にエリザベス女王の母であるクイーン・マザーと妹のマーガレット王女が相次いでお亡くなりになり、控えめではありましたが、パレードだけは行われたことを記憶しています。2012年(60周年)はダイヤモンド・ジュビリー、バッキンガム宮殿の前でとてつもなく長いテーブルが設置され、大規模なストリートパーティが開催されました。私もこれに参加しようと応募しましたが、残念なことに抽選に外れて参加できませんでした。相当な倍率だったようです。なお、同年はロンドンオリンピックもあり、行事続きの年でしたね。2017年(65周年)のサファイア・ジュビリー、そして今年プラチナ・ジュビリーとなります。

#### ■英国全土での盛り上がり

さて今回のお祝いでは、我が家はユニオンジャックをいっぱい連ねて飾ったりし、また街もジュビリーのお祝いのためユニオンジャックや手作りされた装飾品を多く目にしました。まさに国を挙げてのお祝い行事です。

2日(木)の午前中から行われたTrooping of the Colour Ceremony はとても印象的でした。私はテレビで見えていましたが、軍隊の行進では、それぞれの軍隊の制服や行進が持つ意味等の解説があり、私自身も学ぶことが多く勉強になりました。また、イギリス空軍によるFlypast(儀式飛行)は見事でしたね。エリザベス女王自身もバルコニーに出ていらっしゃいましたが、何といても女王の横にいたひ孫さんのコロコロと変わるかわいい表情は多くの人を虜にしていましたね。子供を持つ身としては各種行事で長い間座らせておけるのはすごいことだと思いました。

その日の夜は全国1500ヶ所及び英国連邦国でビーコン(かがり火)が点灯され、私の住んでいる町でも行われたので家族で参加しました。花火が打ち上げられたり、ファイヤーダンサーが登場したりと、企画が目白押しで、地域の一体感が育まれつつ家族で楽しい思い出を作れた大切な機会となりました。



ビーコン(かがり火)が点灯された様子(Pollyさん撮影)



## ぼりーさんの英国玉手箱

4日(土)の夕方から夜にかけて行われたBBC主催のコンサートPlatinum Party at the Palace での冒頭では女王と英国を代表するキャラクターでもあるパディントンが映像で登場しました。これまで謎であった女王のカバンの中身が明らかになり、パディントンと同様、小腹が空いた時に食べられるようマーメイドサンドウィッチを常備しているという“暴露”エピソードや、コンサートの最初の曲であった伝説的ロックバンドQueen の“We Will Rock You”のリズムに合わせてティースプーンでティーカップを叩くところ等、エリザベス女王のユーモアのセンスが光っていましたね。

今回の記念行事では、例年5月末にあるバンクホリデーを移動し、4連休となったこともあり、予想通り多くの人々が国家行事や地域のイベントに参加しました。国民的なムードとしてエリザベス女王に対する多くの好意、尊敬、称賛が感じられました。国民はCOVID-19の大流行の規制が解除されて以来、初めての長期休暇をリラックスして楽しめたのではないかと思います。

### ■記念コレクション

この歴史的な節目となる記憶にあわせ、記念のコレクションをする方も多くいます。例えば、私の家では記念コインを集めています。引越越しを重ねているうちに、紛失したものもありますが、いま手元に残っているものとしては、1953年の戴冠式を祝して発行された記念コインや1977年シルバー・ジュビリーの時のコイン、2012年ダイヤモンド・ジュビリーの時のRoyal Mint(英国王立造幣局)発行のコインがあります。

その他のコレクションでいえば、トリンケットボックス(Trinket Box)という小さい宝石入れの王室のコレクションがあります。私もいくつか持っていますが、なかなかかわいいですよ。あとはマグカップ、Tea Towel(食器を洗淨した後に拭く布やタオル)等の記念品が人気ですね。

今ではわざわざロンドンのバッキンガム宮殿のお土産屋さんに行かなくても、オンラインで様々な王室関係グッズが手に入りますが、特に記念品となると注文が殺到します。私もプラチナ・ジュビリーの記念として何か購入しようと思っていますが、きっと手元に届くのは来年でしょうね。それぐらい注文が殺到するんですよ。



1953年の戴冠式を祝して発行された記念コイン(Pollyさん撮影)

### ■これからの英国王室

と、すでに宴は終わってしまいましたが、あの華やかな行事とは裏腹に、今後の英国王室が様々な問題に直面していることも事実です。今回のプラチナ・ジュビリーはエリザベス女王の立場に焦点が当てられ、英国全土から女王に対する敬意が示され、大変な盛り上がりを見せました。しかし、この盛り上がりが英国の君主制への熱烈な支持とイコールの関係であるかと言えばそういうわけでもないのですよ。英国王室に対する考え方は時代とともに変わってきています。メディアによる様々な世論調査の結果として言われているように、過去10年間で英国王室支持率が大幅に低下しており、特に若者の間ではその傾向が強いようです。エリザベス女王も高齢となり、体力的な衰えを見始めてきており、前途多難な状態です。エリザベス女王の治世後を踏まえて、英国は現在の君主制の役割、王室に関する予算、他国や英国連邦国の選挙によらない元首としての役割等に関して、国民的な議論を行うことが必要になっていると思っています。とはいえ、まずはエリザベス女王の健康と長寿を祈るばかりです。



6月2日(木)、バッキンガム宮殿のバルコニーにて、集まった大勢の人たちに笑顔で手を振る女王と王室メンバー(National World より)

## 山田さんの徒然なるままに

～ JSPS London 現地職員が贈る、知られざる英国を様々な視点から語る痛快エッセイ ～

### 第10回 『ある失読症者の話』



山田 泰子

2016年からロンドンセンターに勤務。開通が遅れていたElizabeth Lineがやっとオープン！でもしばらく日曜日休業？

“Jay Blades: Learning to Read at 51”というBBC1の興味深いドキュメンタリーを紹介しよう。タイトルにあるJay Blades氏とは、最近人気のBBC1 “Repair Shop”という番組のプレゼンターのことである。一般人の依頼者から古くなり破損した思い出の品に纏わる話を聞き、彼を中心とする修繕チームがその品を修繕や復元し、完成したのを見た依頼者が喜び、涙するという、爽やかお涙頂戴系番組とでも言えるだろうか。番組を見ている限りBlades氏はどこか兄貴分的な印象があった。今回紹介する番組タイトルからして彼は51年間Dyslexia(失読症)でその間、読み書きもできないとはどんな人生だったのだろうか？”という単なる好奇心で番組を見始めた。



The Repair Shopの修繕チームとともに(前列中央がJay Blades氏)  
(Forbes より)

英国では現在800万人以上の大人が字を読むことができないといわれており、失読症のことはよく耳にする。“知的能力及び一般的な理解能力は特に異常はないが、文字の読み書きに著しい困難を抱える障害であり、学習障害の要因となる。”というものだ。Blades氏は、“文章を読もうとすると文字が頭に突き刺さるような痛みを感じ、また、文字が泳ぎ始めて見えて集中できなくなる。”と言う。しかし、対処方法はあり克服可能なもので、有名人や英国ロイヤルファミリーの中でも失読症であったことを公言する人は

意外と多い。現在の英国では、小学校を出る11歳の時に必要な学力水準に達していない子供の割合は25%と、4人に1人である。そして、失読症が原因と考えられる割合は、全体の7%から10%とされる。では、残りの15%～18%が水準に達していない原因は何であろうか？この原因の一つとしては、貧困が挙げられており、無料給食(Free School Meals: FSM)の受給対象児童は統計的には成績があまりよくないという。COVID-19の影響により、学習の進捗が全体平均で2ヶ月遅れている中、FSMの児童については7ヶ月遅れている。貧困世帯では、在宅学習を行える環境の確保に苦労しているのだ。

さて、番組はBlades氏が家具修繕職人の功績を称えられ、MBE(大英帝国勲章4等勲爵士)叙勲を知らせる書簡を受け取ったところから始まる。フィアンのLisaさんと共に喜んではいるが、Lisaさんがその書簡を彼に読んで聞かせてあげている。

Blades氏の失読症克服の動機は、当時15歳だった娘に、子供時代が終了すると言われる16歳の誕生日前に、本を読み聞かせてあげたいというものであった。誕生日という期限があり、本人も相当な覚悟で挑むことになる。通常の場合、読み書きができるまで最低1、2年はかかるらしい。失読症克服ボランティアのEmmaさんの指導のもと遠隔授業で始まる。仕事のスケジュール等でなかなか思うようには進まない。それでもひらめきを経験し、努力の成果が少しずつ出てきている。

彼の生い立ちには、いろいろと驚かせられた。彼の母親は、13か14歳の時にバルバドスから英国にやってきて、若くして子供を2人もうけた。彼は父親の存在感を全く経験したことがなく、生活費を稼ぐことで忙しい母親はあまり子供に構ってやれなかった。学校でもあまり勉強に興味がなく、Primary Schoolは楽しかったが、Secondary Schoolは苦境だった。差別的なことを言われると、な

## 山田さんの徒然なるままに

るべく関わらないようにするのが普通だが、Blades氏は反対にそういう輩に向かっていったという、いわゆる問題児であった。また、Secondary Schoolの担当教師はBlades氏が失読症であることを見極めることはなかったと言う。40年程前、Blades氏が通っていた学校にははでの悪い児童を1つのクラスに集めた“Learners Class”があり、本人もその一人であった。特別な支援をすることもなく、ずっと放ったらかし状態であったと言う。また、その“L Class”とは別名“Losers Class(無能組)”と言われた。進路相談でも“お前はどうせ出来損ないの人間にしかならない。次！”と言われる扱い。このような状況では、失読症であることなど見極めてもらえるはずもない。

英国では、Secondary SchoolでGCSE (General Certificate of Secondary Education)を受けても生涯有効となる資格を持たずに学校を出ると、就ける職は肉体労働やドラッグ・大麻の売人等に限られてしまうというが、彼も例外でなかった。しかし、ひよんな事から30歳で成人学生(mature student、日本でいう社会人学生のこと。)として大学に入ることになる。大学とは大量の本を読み、大量の論文を執筆するところであるとその時点では思っていなかったことを聞くと驚きだ。

大学では犯罪学と哲学を専攻したが、当時のガールフレンドはBlades氏が本を読めないことに気づき、失読症の検査を受けることを勧めた。ここで初めて失読症であることが診断された。31歳の時である。失読症と診断され、大学側はどうするのかと思えば、別に退学を促すのでもなく様々な支援をしてくれた。技術の進歩に助けられ、本を音読したり自身の発した言葉を文字に変換したりできるコンピューターを提供してくれる等、読み書きについての不自由がすべてなくなった。これらの技術なしでは、全く授業についていけなかった。当時の哲学の教授は、Blades氏に対し“君は20人から40人の講義では全く目立たなかったが、少人数クラスではとても貢献してくれたし、なんととっても熱心だった。君は学術用語を全く知らず、全く準備もせず、エッセーでも喋るように書かれたものだったけど、最高の論文を書いていたよ。それが本当に不思議だった。君が失読症であったことは知らなかったけど、それにしても君は変わった学生だったよ。”と語った。そして大学卒業時にはHonours Degree in Criminologyの学位を取得した。

教授はBlades氏のことを“ずっと失読症だったから特に読む能力がなくても周りで何が起きているかをなぜか読み取ることができたのであろう。”と言う。そんなBlades氏は“失読症のおかげでいつの間にかスーパーパワーを身に付けていたんだけど、そ

れも大学に入ったことでその力があることがわかったんだ。”と笑っていた。

ちなみにBlades氏が通った大学はBuckinghamshire New University といって、彼のような成人学生在籍率が78%というところである。“失読症を克服してからまた来てね。”と冷たくあしらったのではなく、ありのままのBlades氏を受け入れ、素晴らしい支援をしたというこの大学。大学名は聞いたことなかったが、きっとBlades氏が失読症を持った学生第1号ではなかったのであろう。

さて話はちょっと飛ぶが、日本では成人学生とはどうなんだろう。Newsweek 日本版の記事によると、30代以上で学び直しを希望している人の数は男女合計で500万人以上。しかし、現実には叶えているのは数%でしかないという。社会人がもう一度学校で学び直すことはあまり歓迎されていない。記事では“職業訓練が企業内で閉じていて、従業員に外部の機関で教育を受けさせようとしない。教育有給休暇などはもつての他で、仕事を終えて夜間の学校に行くといっても雇い主が嫌な顔をする。”とある。

読み書きができない人でも大学で学ぶ機会のある英国と、学びたいけど社会が受け入れてくれない日本。これは単に文化の違いで片付けることではないであろう。社会が可能性を広げないとは、なんとも悲しくなる。そんな中、英国は国を挙げて学習者の人口を増やそうとしている。

現在、英国では生涯スキル保証(Lifelong Skills Guarantee)という重要な計画がある。その一環で生涯学習資格(Lifelong learning Entitlement: LLE)というものが、今年9月から開始される予定である。これは、従来の3から4年制の学位コースにこだわることなく学習者、雇用者、経済全体が必要としている科目の短期コース(現在のところ主にSTEM, 医療系、デジタル、イノベーション、教育、ネットゼロ支援のコース)を通して、生涯にわたるスキルの向上や維持を促し、目まぐるしく変わる技術に追いつき英国の経済力を高めることが目的である。6週間から1年間(パートタイムであれば)、都合の良い時に勉強するというものである。高等技術教育の再認識ということだが、国全体で学習者を増やすということはよいことではないだろうか。意外と社会に出てから教育/スキルの重要性を感じることもあるので、ぜひ成功させてもらいたいものである。また、現在生まれてくる子供の平均寿命は100歳になると言われており、仕事からの引退時期も遅くなるであろうから、中年期の人々が技術の進歩に追いつくための良い機会にもなるのであろう。さらに、2025年からは、こうしたコースに対する学費ローンの導入がいま検討されている。生涯ローン



## 山田さんの徒然なるままに

資格(Lifelong Loan Entitlement: LLE)と呼ばれるもので、年配の人たちは人生の後半期に借金を作ることに躊躇があるだろうから、検討を重ねていかないと導入は難しいだろうという感想である。

またBlades氏に話を戻そう。まだ失読症克服のコースは修了してはならず、まだ教科書も2冊ほど残っている状態ではあったが、娘さんに本を読んであげることができた。たいへんたどどしく読むが51歳の父親の顔は真剣であった。娘さんもたいへん喜び、本人もとにかくコースを修了させるとまだまだ意欲的である。



2022年5月3日 Jay Blades 氏のMBE叙勲式 (BBC Newsより)

Blades氏の本職とする家具修繕とは“価値のないものから価値を見出す”職業でもある。学校を出たときには”出来損ないの人間にしかない。”と言われたが、MBEの叙勲に至ったBlades氏は、古いものや傷ついたものに“手を加えること”によって価値のあるものになれることを体現している。その“手を加えること”とはここではまさに人々からの助けや配慮、大学での学習補助だったコンピューター技術等の支援である。人は人との関わりによって生かしているのである。人に迷惑をかけるとは言わず、助けが必要であれば、それを求め、助けの必要な人がいれば今度は自分が助けてあげればよい。人と人はお互い様である。ドキュメンタリーを見終わって、まさに爽やかに涙がぼつりと出てしまったが、本当にBlades氏、かっこよかった！

~~~~~

(後日談であるが、なんとBlades氏は母校となった Buckinghamshire New University の初代総長に就任した。同大学にあった家具修繕系のコースが2014年に廃止となっていたが、これを復活させることを条件に就任を承諾したという。また、学生を支援するための新たな奨学金制度の開始も計画中らしい。“家

族内で初めて大学に進学する学生等に対しても手厚く支援をしていくつもりだ。多くの人が思い浮かべる典型的な総長ではないが、世の中に役立つことを行っていきたい。”と抱負を述べた。)



Blades氏とBuckinghamshire New University 学長のNick Braisby 教授 (BBC Newsより)

## 【参考資料】

“Jay Blades: Learning to Read at 51”:

<https://www.bbc.co.uk/programmes/m0013wcj>

The Story of Jay Blades: How can Choice And Chance Combine For A Successful Career?

<https://www.forbes.com/sites/michaelbarthur/2022/01/23/the-story-of-jay-blades-how-can-choice-and-chance-combine-for-a-successful-career/>

失読症の定義:

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%87%E3%82%A3%E3%82%B9%E3%83%AC%E3%82%AF%E3%82%B7%E3%82%A2>

社会人の学び直しの機会が閉ざされた、日本の“リカレント教育”の貧困な実態:

<https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2022/01/post-97934.php>

Short university course to provide flexible training :

<https://www.gov.uk/government/news/short-university-courses-to-provide-flexible-training>

The public likes the idea of lifelong learning – but not a ‘lifelong loan’ : <https://wonkhe.com/blogs/the-public-likes-the-idea-of-lifelong-learning-but-not-a-lifelong-loan/>

Repair Shop host Jay Blades appointed MBE at Windsor Castle”:

<https://www.bbc.co.uk/news/uk-england-shropshire-61318067>

Jay Blades appointed first chancellor of Buckinghamshire New University : <https://www.bbc.co.uk/news/uk-england-beds-bucks-herts-61507923>

Updated : Furniture courses to be axed by Buckinghamshire New University :

<https://www.bucksfreepress.co.uk/news/10965343.updated-furniture-courses-to-be-axed-by-bucks-new-university/>

## Recent Activities

### JSPS London主催 第1回Interdisciplinary Talk開催報告

#### Interdisciplinary Talkとは？

JSPS London主催による、在英研究者同士のネットワーキングを促進するための交流イベントである。Interdisciplinaryという名の通り、専門分野や所属機関・部局の異なる研究者同士が特定のテーマについて議論を交わすほか、自身の研究環境やキャリアパス等について自由に情報交換を行うことを目的とする。第1回となるイベントを2022年2月21日(月)にオンラインで開催したため、以下に概要を報告する。

#### 記念すべき第1回のテーマは「COVID-19」

COVID-19の感染拡大は社会のあり方を一変させ、現在に至るまで著しい影響を及ぼし続けている。そこで、COVID-19を今回のトークテーマとし、各分野の第一線で活躍し近年COVID-19に関連する研究を行っている在英研究者4名にご参加いただいた。ファシリテーターを務めたImperial College Londonの小野昌弘氏は免疫学が専門であり、COVID-19重症・中等症患者のT細胞に関する研究について紹介した。London School of Hygiene & Tropical Medicine(長崎大学にも在籍)の遠藤彰氏は感染症数理モデルが専門で、数理モデルを用いたCOVID-19の疫学分析を紹介した。University of Leedsの小林義治氏は国際関係が専門で、COVID-19政策やワクチンに関する世論についての研究内容を紹介した。University of Oxfordの茂木良平氏は自身の専門分野である人口学において、COVID-19研究がどのように行われているかを紹介した。

各参加者からの研究内容紹介に加え、英国におけるCOVID-19のデジタルコンタクトトレーシングや各国の水際対策の状況等について互いに質疑応答を行い、闊達な議論がなされた。また、各自の専門分野におけるリサーチデザインやデータの取得方法、異分野共同研究について情報交換した。

#### 今後の活動について

情報交換終了後、本イベントを振り返りながらJSPS Londonの今後の活動に関する意見や希望を伺った。

「異分野の研究者の知見を得る機会となり、楽しめた」(遠藤氏)、「分野横断の研究を進める上で必要となるネットワークを構築できるこの種のイベントは重要」(小林氏)、Interdisciplinary Talkに対する非常に好意的な意見をいただいた。

パンデミックの影響により多くのイベントがオンラインで開催されるようになったが、「オンラインに比べ、対面イベントの方が一度により多くの研究者と交流できる」(遠藤氏)、「対面イベントを開催するのであれば、(研究者によって興味関心が異なるため)ある程度近接した分野の研究者同士が交流できるような構成にすると、意味のある議論ができると思う」(小野氏)といった今後のイベントに対するご提案をいただいた。

その他、「トークテーマによっては、日本人に限らず在英研究者を対象とすることで、参加者の層が厚くなり、議論が充実したものになるだろう」(小野氏)と、JSPS Londonのミッションである日英学術交流を推進する上で有用な助言をいただいた。一方、「日頃、日本人との交流があまりなく、在英日本人研究者同士が交流できるイベントは貴重」(小林氏)、「日本の研究環境をよりよくするためには？という大局的な議論が可能になるし、たとえ異分野であっても特定の問題について相談できる日本人研究者とのネットワークが形成できるので、日本人に限定したイベントもまた有益」(茂木氏)、「日英両国の研究環境をわかっている研究者からの情報やアイディアは貴重なデータとなりうるので、ぜひ今後日本における研究環境の発展に活用していただきたい」(小野氏)とのご意見をいただき、JBUK(注)を対象とした活動の意義を改めて認識した次第である。

末筆ながら、本イベントの開催にあたりご協力を賜りました  
ファシリテーターの小野昌弘先生をはじめとする参加者の皆  
様に、この場を借りてお礼申し上げます。

(2021年度国際協力員 迎町彩織)

注)在英日本人研究者(JBUK: Japanese Researchers  
Based in the UK)のネットワーク。登録はこちらから。

<https://www.isps.org/jbuk/>

ファシリテーター  
小野昌弘  
Reader in Immunology  
Imperial College London  
専門：免疫学



Masahiro Ono



Ryo Mogi

茂木良平  
Postdoctoral Researcher  
University of Oxford  
専門：人口学、社会学

小林義治  
Associate Professor  
University of Leeds  
専門：国際関係



Yoshiharu Kobayashi



Akira Endo

遠藤彰  
日本学術振興会海外特別研究員  
London School of Hygiene & Tropical  
Medicine  
長崎大学特任研究員  
専門：感染症数理モデル

### 第1回Interdisciplinary Talk参加者



## Vol.22 Dr Ojodomo J. Achadu

**Dr Ojodomo J. Achadu**

Research Fellow (MSCA COFUND), Department of Chemistry/IAS, University of Warwick.

**Biography**

|             |                                                                      |
|-------------|----------------------------------------------------------------------|
| 2021 –      | Marie Skłodowska-Curie COFUND Fellow, University of Warwick, UK      |
| 2019 – 2021 | JSPS Postdoctoral Fellowship, Shizuoka University, Japan             |
| 2019 – 2019 | Postdoctoral Fellowship, University of Bordeaux, France              |
| 2018 – 2019 | SARCHI Postdoctoral Fellowship, University of Zululand, South Africa |
| 2015 – 2017 | PhD in Chemistry, Rhodes University, South Africa                    |
| 2013 – 2015 | Lecturer, Chemistry Department, KU, Nigeria                          |
| 2010 – 2012 | M.Sc. Analytical Chemistry, University of Lagos, Nigeria             |
| 2002 – 2007 | B.Sc. (HONS) Industrial Chemistry, University of Jos, Nigeria        |

What a GREAT PLEASURE to express my Voice! Moreso as a budding scientist of African descent to be part of the JSPS UK & Ireland Alumni. My academic and research sojourns over the past few years have included taking up high-flying postdoctoral fellowships in South Africa, France, and quite recently Japan, at the height of the global pandemic, under the auspices of the prestigious JSPS postdoctoral fellowship for foreign researchers. I cannot help but mention how my academic journey so far started with the opportunity to study Chemistry at the undergraduate level at the University of Jos in Nigeria, and how I was molded by it. After some years of lectureship in Nigeria, my pursuit of cutting-edge research/knowledge led me to further advance in Chemistry/Nanochemistry by enrolling for PhD studies at Rhodes University in South Africa. The relevant research experience and contacts gained during this time gave me the opportunity to network with Professor Enoch Y. Park at Shizuoka University, Japan, where I ultimately gained significant research experience in biosensors design and diagnostic testing of pathogens. The research and networking opportunities that the JSPS fellowship offered me were a major turning point in my academic pursuits. It has greatly helped to globalize my research prowess and fulfil part of my aspirations of getting involved with cutting-edge research and an academic career in areas of emerging new applications and revolutionary discoveries with global implications. In this light, my focused research activities in Japan were in biosensors design using the new fields of nanotechnology and nanochemical techniques - largely involving the development of optical and electrochemical nanosensors/biosensors for virus detection.

I conducted my research activities in Japan between 2019 and 2021, and frankly, there could not have been a better time to engage in the design of biosensors with far-reaching global

impacts than during the COVID-19 global pandemic. As the pandemic spread and confined people indoors, in Shizuoka University's NanoBioLab we were tasked with developing sensitive point-of-care deployable test kits for the detection of COVID-19. This was in addition to developing biosensors for influenza virus, norovirus and hepatitis E virus, respectively. It goes without saying that the global pandemic showed the world how quickly disease-causing viruses can take root and threaten our civilization. As a result, there was a massive global need for expertise to develop ultra-sensitive and rapid detection of the infectious virus(es) for public health and surveillance. This was a huge opportunity for me as increasing amount of funding poured in to support my proposed research activities. As a fulfillment of my research duties and achievements throughout my “pandemic research” period in Japan, one of my published works earned a special recognition with a front-page cover feature in ACS Applied Materials and Interfaces ([View](#)).



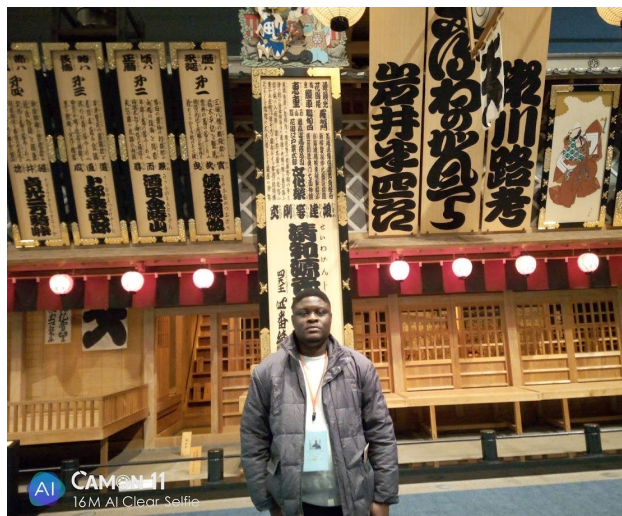
*Shizuoka University where I carried out my research. Mount Fuji-san can be seen from the lab.*

## Voice! from Alumni member

This was achieved by working with Japanese colleagues, notably Dr Kenshin Takemura, and other top researchers at Shizuoka University such as virology expert - Professor Tetsuro Suzuki; photonics expert - Professor Shoji Kawahito and Professor Masahito Yamazaki – a microscopy imaging expert. Through collaborative studies and combined expertise, we jointly developed a universal virus diagnostic biosensor using a novel nanoassembly of pH-responsive nanogels and plasmonic molybdenum trioxide quantum dots via surface-enhanced Raman scattering – I was the lead investigator! In January 2021, the developed biodetection technology was submitted and received a hearing from the Japan Science and Technology Agency (JST) for a Japanese patent (application no.: 2021-001391). In addition, the developed system and new detection mechanism were advertised ([View](#)) for corporate partnerships in Japan, and overwhelming interests were received from more than 10 diagnostics and pharmaceutical Japanese companies which include Hamamatsu photonics, Eiken Kagaku, Ohkura Pharm. and Sysmex. In respect of our joint research work, my host, Professor EY Park forged an academia-industry partnership to commercialize this technology with Eiken Kagaku Co. and we are having ongoing meetings and consultations that will last several years. Moreover, more funding was received by my host from the Japan Agency for Medical Research and Development (AMED), and we have further modified this technology for a “plug and play” detection of SARS-CoV 2 by interfacing 3D nanostructures with Raman optical technology with point-of need diagnostic potential ([View](#)).

As part of my non-academic activities, I had the opportunity to socialize and learn more about Japanese society and culture. Meanwhile, this experience was severely limited by the pandemic which made it difficult to explore Japan to the fullest due to closures of public places, and we were unable to visit many historical sites as planned. Still, we (with my family) were able to visit some historical sites and some places in Shizuoka Prefecture such as Lake Tanuki, Shiraito Falls, Mount Fuji (beautiful view from the lab), Fuji-Hakone-Izu hot springs (onsen), Hamamatsu flower park, Mihono-Matsubara etc., as well as some notable places in Tokyo before leaving Japan. I fondly remember how our booked flights for a visit to Hokkaido were cancelled and money refunded. We wanted to experience the annual Sapporo Snow Festival, but it was cancelled in 2020 due to restrictions. The same was true of our planned visits to Osaka and Kyoto, some places I would have loved to visit. Nonetheless, I plan to revisit these places when I return to Japan in the near future for a BRIGDE fellowship/research cooperation visit.

Overall, the JSPS postdoctoral fellowship was an excellent programme/experience for me as a young researcher and it positioned me to conduct cutting-edge research in Japan. One of the pecks of the programme was the provision of a fresh learning/research environment which was a great avenue for me to apply my research skills and capabilities in multidisciplinary research projects with Japanese scientists. The two years of my life during the JSPS fellowship are undoubtedly a great boost to my career and leadership prospects in academia, as I have formed lifelong research networks and partnerships as well as friends in Japan. It also provided me with a once-in-a-lifetime highly coveted and rare opportunity to meet, learn and understand the unique Japanese people and culture. My family (wife and son) have Japanese friends that are in constant communication till date.



JSPS welcome programme tour to the Grand Edo-Tokyo Museum in February 2020.

## Voice! from Alumni member

For me, I will continue to leverage my experience and knowledge gained from the research experience in Japan to pursue cutting-edge research and foster collaborations for interdisciplinary research opportunities here at the University of Warwick.



*End-of-year dinner with all members of the Nanobiosensor/BioLab research team of Prof. E.Y Park (in the middle) at Shizuoka university before the global pandemic. Dec. 2019.*

## JSPS Alumni Association of the UK and the Republic of Ireland (RoI)

### Please join the JSPS Alumni Association of the UK and the Republic of Ireland (RoI)!

As a former JSPS Fellow, we would like to ask you to join the JSPS Alumni Association of the UK and the Republic of Ireland (RoI). Our Alumni Association was established in 2003 and carries out a number of activities throughout the UK and RoI with numerous benefits for members. One of them is “The JSPS London Symposium and Seminar Scheme.” The aim of this scheme is to provide support for members holding a symposium or seminar and to create high quality collaboration in cutting edge/ internationally competitive areas at institutional or departmental level between research institutions in the UK or RoI and Japan. Under this scheme, JSPS London will partially support the following matters\*:

\*The detailed support is subject to change.

**1** Costs for inviting symposium/ seminar speakers from Japan

**2** Costs for hiring a venue, printing materials, advertising and so on\*

**3** Strategic support to help advertise and organise the event.

The application details of this scheme will automatically be e mailed to registered Alumni members during our next call. For further information please contact JSPS London by email at [enquire@jps.org](mailto:enquire@jps.org). Again, this is exclusively open to the JSPS Alumni members. So why not join us today?

**JSPS**  
UK & IRELAND

ALUMNI  
ASSOCIATION

#### Joining us

Simply register your membership here

[https://www.jps.org/alumni\\_about/](https://www.jps.org/alumni_about/)

Once registered you will receive an ID number and password to access the Alumni Association web pages and can start networking.



# JSPS Fellowship Programmes & International Collaborations

## Application Schedule for FY2022/23

### Fellowship Programmes

\*The Pre/Postdoctoral Short Term programme is also managed by other JSPS overseas offices in Europe and USA independently. For more information, please check their websites.

| Programmes                          | Suitable Applicants      | Apply to            | Recruitment       | 2022              |     |      |     |     |     | 2023~ |     |               |     |             |               |                   |                 |
|-------------------------------------|--------------------------|---------------------|-------------------|-------------------|-----|------|-----|-----|-----|-------|-----|---------------|-----|-------------|---------------|-------------------|-----------------|
|                                     |                          |                     |                   | Jul               | Aug | Sept | Oct | Nov | Dec | Jan   | Feb | Mar           | Apr | May         | Jun           | Later             |                 |
| Summer Programme                    | Pre/Postdocs             | British Council TYO | -                 |                   |     |      |     |     |     |       | TBA |               |     |             |               | Jun-Aug (TBA)     |                 |
| Pre/Postdoctoral Short Term (1-12m) |                          | JSPS TYO            | 1st Call (FY2023) |                   |     | 30th |     |     |     |       |     |               |     | Apr-Mar2024 |               |                   |                 |
|                                     |                          |                     | 2nd Call (FY2023) |                   |     |      |     |     |     | 13th  |     |               |     |             |               |                   | Aug-Mar2024     |
|                                     |                          |                     | 3rd Call (FY2023) |                   |     |      |     |     |     |       |     |               |     |             |               | 2nd               | Jan2024-Mar2024 |
| Postdoctoral Standard (12-24m)      |                          | Postdocs            | JSPS TYO          | 1st Call (FY2023) |     |      | 2nd |     |     |       |     |               |     | Apr-Sep     |               |                   |                 |
|                                     |                          |                     |                   | 2nd Call (FY2023) |     |      |     |     |     |       |     |               |     | 2nd         |               | Sep-Nov           |                 |
| Royal Society                       | -                        |                     |                   |                   |     |      |     |     |     |       | TBA |               |     |             | Sep-Nov (TBA) |                   |                 |
| British Academy                     | -                        |                     |                   |                   |     |      |     |     | TBA |       |     | Apr-Nov (TBA) |     |             |               |                   |                 |
| Invitational: Long Term (2-10m)     | Mid Career to Prof level | JSPS TYO            | -                 |                   |     | 2nd  |     |     |     |       |     | Apr-Mar2024   |     |             |               |                   |                 |
| 1st Call (FY2023)                   |                          |                     |                   |                   | 2nd |      |     |     |     |       |     | Apr-Mar2024   |     |             |               |                   |                 |
| 2nd Call (FY2023)                   |                          |                     |                   |                   |     |      |     |     |     |       |     |               | 2nd |             | Oct-Mar2024   |                   |                 |
| BRIDGE Fellowship                   | Alumn Members            | JSPS LON            | -                 |                   |     |      |     |     |     |       | TBA |               |     |             |               | Jul-Mar2024 (TBA) |                 |

Application period or deadline Fellowship starting time

### International Collaborations

\*The following schedule is for the researchers on the Japanese side.

| Programmes                      | Suitable Applicants       | Apply to                  | Duration                              | 2022 |     |     |     |     |     | 2023~ |     |                  |                  |     |     |                   |
|---------------------------------|---------------------------|---------------------------|---------------------------------------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|------------------|------------------|-----|-----|-------------------|
|                                 |                           |                           |                                       | Jul  | Aug | Sep | Oct | Nov | Dec | Jan   | Feb | Mar              | Apr              | May | Jun | Later             |
| JSPS London Symposium & Seminar | Alumni & JBUK members     | JSPS LON                  | Symposium: 1-3 days<br>Seminar: 1 day |      |     |     |     | TBA |     |       |     |                  |                  |     |     | Jun-Feb2024 (TBA) |
| Bilateral Programme [A]         | Research Groups           | JSPS TYO<br>Royal Society | Joint Project: Max 2 yrs              |      |     | 6th |     |     |     |       |     |                  | Apr-Mar2025(max) |     |     |                   |
| Bilateral Programme [B]         |                           | JSPS TYO                  | Joint Project: Max 2 yrs              |      |     | 6th |     |     |     |       |     |                  | Apr-Mar2025(max) |     |     |                   |
|                                 |                           |                           | Joint Seminar: Max 1 week             |      |     | 6th |     |     |     |       |     |                  | Apr-Mar2024      |     |     |                   |
| Core to Core Programme          | Institutions/ departments | JSPS TYO                  | Max 5 yrs                             |      |     |     | TBA |     |     |       |     | Apr-Mar2028(max) |                  |     |     |                   |

Application period or deadline Project starting time

\*When you apply to JSPS Tokyo, please note that the application periods and deadline above are for the head of the host institution to submit the applications to JSPS Tokyo. The time frames for host researchers to submit their applications to their institution are normally earlier. Therefore, Fellowship candidates must discuss their preparation schedules with their host researchers. Please also check each website for more details.

## Programme Contact Information List

### Fellowship Programmes

■ Summer Programme  
[British Council in Japan](#)

■ Postdoctoral Standard  
[JSPS Tokyo](#)  
[The Royal Society](#)  
[The British Academy](#)

■ Invitational Fellowships  
[JSPS Tokyo](#)

■ Pre/Postdoctoral Short Term  
[JSPS Tokyo](#) [JSPS London](#)

■ BRIDGE Fellowship  
[JSPS London](#)

### International Collaborations

■ JSPS London Symposium/Seminar Scheme  
[JSPS London](#)

■ Bilateral Programme  
[JSPS Tokyo](#)

■ Core to Core Programme  
[JSPS Tokyo](#)

■ JSPS International Joint Research Programme  
[JSPS Tokyo](#)

### ● Past Events ●

- **JSPS Programme information event**  
Online, 27 April 2022
- **JSPS Programme information event**  
University of Southampton, 15 June 2022

### ● Upcoming Events ●

- **JBUK annual meeting**  
**The 4th Survival Seminar in the UK**  
JSPS London, 6 July 2022
- **Pre-Departure Seminar**  
Online, 11 July 2022

### Follow us on ...

For Japanese researchers in the UK or RoI/ 在英・アイルランド日本人研究者の皆様、ご希望の方に、JSPS London が開催するイベントのご案内やニュースレター等をお届けしています。対象は、英国・アイルランドの大学・研究機関に所属する研究者（ポスドク・大学院生含む）及び在英日系企業研究所の研究者の方々です。下記リンクにてご登録ください。

<https://ssl.jsps.org/members/?page=regist>

JSPS Tokyo が運営するJSPS Monthly（学振便り）は、JSPS の公募案内や活動報告等を、毎月第1月曜日にお届けするサービスです（日本語のみ／購読無料）。情報提供を希望される方は、下記のリンクにてご登録ください。

<https://www.jsps.go.jp/j-mailmagazine/index.html>



日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター (JSPS London)  
 14 Stephenson Way, London, NW1 2HD, United Kingdom  
 Tel : +44 (0)20 7255 4660 | Fax : +44 (0)20 7255 4669  
 E-mail : [lon-info@overseas.jsps.go.jp](mailto:lon-info@overseas.jsps.go.jp) | <https://www.jsps.org>

JSPS London ニュースレター  
 監 修：小林 直人  
 編 集 長：安原 幸司  
 編集担当：滝沢 航平